

Title	<書評> ツヴェタン・トドロフ(大谷尚文 訳), 『共同生活-一般人類学的考察』, 法政大学出版局, 1999年
Author(s)	後藤, 正憲
Citation	年報人間科学. 21 P.363-P.366
Issue Date	2000
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/7656">https://doi.org/10.18910/7656</a>
DOI	10.18910/7656
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ツヴェタン・トドロフ

(大谷尚文 訳)

## 『共同生活 — 一般人類学的考察』

法政大学出版局、1999年

後藤正憲

「社会」と「個人」という二つの概念は、コインの表裏のようなもので、それぞれ互いを抜きにしては語ることができない。両者の関係のあり方についての様々な理念が、種々の哲学を形づくっている。この両者の関係性については、古来人文科学の学問領域において、もともと主要なテーマであり続けてきたのみならず、社会学や人類学など、比較的新しい学問分野においては、その基底をすら成している。

こうした中で、本書のねらいは、社会に先行する個人の実存というものを、完全に否定してしまうことにある。『他者の記号学』の中で、「外側の、遠くにいる他者についての問題」に分析を施した著者が、今度は「内側の、近くにいる他者についての問題」とでも呼べるものに取り組んでいる。つまり、個人内部の社会性（他者性）の探求である。

このテーマ自体は決して新しいものではない。それぞれの個人（または、個々の共同体）が、全く孤立したままでは存在し得ず、様々な形で全体を表出しながら現れるとする見方は、すでにデュルケームやモース以来のフランス社会人類学の伝統に根づいている。さらに深く突き詰めれば、それこそライプニッツのモノイド理論にまで遡ることになるだろう。しかし、実際このように使い古された議論でありながら、本書で展開される議論には、非常に今日的な意味合いが織り込まれている。この点について、まずは本文のあらすじを追いながら、検討してみたい。

第一章の「思想史への一瞥」は、この問題に著者自身が切り込ん

でいく前に、ヨーロッパの哲学思想史において人間の社会的な次元がどのように扱われてきたかということ、ざっと読者に紹介する。そこでまず見いだせるのは、思想史の中の個人主義的な伝統である。ラ・ロシュフーコーからカント、及びバイユやフランシヨによるサドの解釈、そしてフロイトの心理学に至るまで、それぞれが描き出す人間の本性は、非社会的で孤立している。そのような中で、個人としての人間自体は本質的に不完全であり、常に他者による公的な承認を必要とするということを見いだしたルソーを契機として、人間の社会的本性についての理念が芽生えてきたことが指摘される。それはアダム・スミスの「事情に通じた公平な観察者」という社会観にもつながっていく。

第二章の「存在する、生きる、実存する」では、フロイトの欲動の二元論的分類（生の欲動と死の欲動）に対して、人間の生を三つの段階に分類する理論が提唱される。この、宇宙的、動物的、社会的なレベルに基づいた人間存在の三つの段階——存在する、生きる、実存する——のうち、一番最後の「実存する」こそが、人間をほかの動物から決定的に分かつ特徴的な欲動として明示される。ここでは、フロイトの生物学主義的なヴィジョンによって分けられた乳幼児期の個人の発達段階は、子供が複数の新しい承認を要求することによって自らの実存を確かめていく段階として定義し直され、また一方で老いによる生命力の減退は、徐々に承認を失っていく老人の孤独として解釈される。

第三章の「承認とその運命」では、大きく分けて二つの部分に分

けられる。その前半部分では、他人から与えられる承認には、いくつかの種類や段階があることが検証される。その上で、いかなる形をとろうとも、對他関係を取り結ぶことによって他人から承認を得るということが、いかに人間のあらゆる行動の根本的で核たる要素となっているかが示される。

しかし、実際承認を得ることがいかに基本的な欲動ではあっても、日常我々が遭遇するのは、しばしば他人の無関心であったり拒否であったりする。第三章の後半では、この失敗した承認が引き起こす「対症療法」として考えられる様々なケースが、非常にきめ細やかな分析を伴いながら列記される。そして更に、そういった様々な承認のひずみが生み出す不都合を免れるために、承認のあるべき姿がうちだされる。

第四章の「人格の構造」では、これまでのところで人間の条件に基本的なものとして位置づけられた對他関係そのものの、重層性について考察される。まず、具体的にプルーストの小説の一場面を使って、主人公の内面には同時に複数の要素が働いていることが指摘される。そこでは、自己・承認の主人・欲望の対象という三つの領域が設定されるが、いずれも個人の間主観的な諸体験を通して歴史的に形作られるものである。実際にはこれらの領域が、それぞれ肯定的あるいは否定的に働いて、各人の人格を形成するのであるが、日常の人と人との接触においては、このように内的な重層性を備えた人格同士が、互いを調整しあっている。つまりここでも、人間的な実存が、他者との相互作用によって成り立つことが確認される。

そして最後に、第五章の「共存と完結」では、実存を感受するの  
に他人の承認を必要としないあり方として、自己の「完結」が紹介  
される。それは宗教的な経験や美の感情がそうであるように、判断  
のために一切の比較や媒介を必要とせず、純粹な現前として体得さ  
れるものである。しかしこの「完結」も、個人主義的心理学の伝統  
が説くような、孤立した個人の肯定性を主張するための論拠とはな  
り得ず、あくまで人の社会的本性を前提とするものであることが強  
調される。

以上のような、豊かな資料や具体例に基づいており、しかも非常  
に首尾一貫した論点は、著者の軽快で明晰な筆致と相まって、最後  
まで読者を惹きつけてやまない。ただ、本書を読み進めていく中で、  
いくつか疑念がわいてくることも事実である。しかしそれらの疑念  
も、最終的に全体像として浮かび上がってくる本書の特徴の中で解  
消される。ところで、この最終的に浮かび上がってくるものの中に  
こそ、本書の議論が持つ今日的な意味合いが隠されているのだ。

この、最初に抱かれるかもしれない疑念と、後に明らかにになって  
くる本書の特徴との間のずれは、本質的には一つに重なる二つのこ  
とがらにおいて現れるように思われる。

まず一つめに、本書では個人の内観に重点を置いて論じられてい  
るのだが、そこに現実的な社会問題との接点を見いだすことは難し  
いのではないかと懸念があげられる。表題の「共同生活」とい  
う言葉も、実際何らかの様式を備えた生活形態を指すのではなく、  
各個人の内面における社会的本性というような意味で使われている。

このように、論点が個人の内的な位相に止まっているのなら、果た  
してその主張は、どこまで日常の社会的な事象に対処しうるものだ  
ろうか。

そして二つめに、本文の、特に第四章や第五章のあたりでは、非  
常に明晰で、個人の内面について何らの危うさもはらむことのない  
解析が行われるが、その微塵も疑念を抱かせることのない論調に  
対して、かえって戸惑いを感じてしまう。その流れるような構造論  
的論述に身をゆだねて読むのは、確かに心地よい。だが実際、個人  
の内面や、各個人間のコミュニケーションなどは、そのような明快  
な図式で表すことができるのだろうか。

しかし最初の点については、著者が社会性を持つ以前に存在する  
個人というものを否定していることから、必然的にそうなるともい  
えることだが、実際には本書において、個人の内的な理論のレベル  
と社会的な実践のレベルはしっかりとつながっており、両者の間を  
自在に、しかも無理なく横断することができる。そこでは、社会的  
であることは人間の本質であるという基本的なテーゼから、実に  
様々なトピックについての検討が引き出される。例えば労働と余暇、  
開発と援助の問題、若者によるアルコールや薬物依存、さらにはフ  
アナティクな民族主義イデオロギーに至るまで、多岐にわたる事  
象が考察の対象となっており、議論が政治的・社会的な場面にも開  
かれたものであることを証明している。

ただ、ここで留意すべきは、このように現実的な諸事象を扱う場  
合に、著者は人間の社会的本性という基本テーゼのほかに、何ら

の理論的枠組みを適用することも否定している点である。例えば、道徳的な判断は、価値を一元化することによって、人間の基本的な要求をゆがめてしまう可能性があるし、民主主義あるいは平等主義的な理論は、承認を受ける側と与える側という、本来非対称的な関係をうまく説明できない。また、人が他人との関係に見いだす承認は、物量化することはできないので、功利主義や実証主義による「科学的」な解明も不可能である。それゆえ、これらの理論的枠組みを用いて、個人か社会の一方に重点を置きつつ事象にあたらうとする試みは、必然的に失敗せざるを得ない。

そこで、個人か社会かということではなく、場面場面で取り結ばれる関係性に立ち帰って考えることが必要となってくる。実際、個人と社会の二元論を越えられない諸々の議論に対し、個々の對他関係のあり方にこそ注目することを促す著者の主張は、他の基準の物差しからはこぼれ落ちるような事象に対処することを可能にしている。そのことはまた、諸事情の普遍的な改善へ向けて、積極的な意味合いを持つ。実は、このような視点から個々の社会的問題をとらえなおしてみることこそ、今日においては何より重要なのである。残念ながら、現在そのような問題意識は、政治綱領においてはなおのこと、批評家や人文系の論者においてさえ希薄である。卑近な例で言えば、一連の日の丸・君が代論争において、本質論的な立場からその成り立ちの不純さを告発する歴史学者や、それらの象徴を軍隊の全体主義に直結させて絶対悪のレッテルを貼る教育者は、畢竟日の丸・君が代を日本の国旗・国歌として定めることを独断的に明

文化化しようとする政府と同じ過ちを犯していると言えないだろうか。そこには、今日に至るまでの時間的経過の中で、個々の人間が日の丸・君が代とどのように接してきたのか、それらは個々の生活の中でどのような意味合いを持つものだったかということに対する問いかけの姿勢が欠けている。ところが、実際はそのような個々の関係性の中にこそ、描かれるべき歴史があるのだ。

このように、道徳的、政治的、経済的な枠組みを取り払った場においては、人間の生活についての理解に脆弱な基盤しか残らない。人間がその本性として他人に依存するものである限り背負い込むことになる不安定さについては、決定的な解決策というものを持たない運命にある。本書に展開される人間の本性についての確固たる解析も、実はこのような関係の不安定さを前提としているのである。

人間は絶対的な承認を希求するものでありながら、その生の営みは日々の時間の中で展開され、そこで他者と取り結ばれる様々な関係も、刻一刻と変化していく。この、人間の条件として運命づけられた矛盾は、ルソーがそれに気づいていたように、私たちに「はかない幸福」しか約束しない。ただ、これを絶望的に受け取ってはいけない。著者はそれを、両側に目のくらむような深淵が控えている「狭い小道」にたとえたが、これを彼のペシミズムと解釈する必要はない。狭く険しいものではあっても、確かに幸福へと続く信頼すべき一本の道があるのだということを、彼は提示してくれたのだ。人文科学に従事する私たちは、むしろこの狭い小道に沿って見えてくるものに意識を集中するべきではないだろうか。